

Newsletter

JAPANESE SOCIETY OF EDUCATIONAL INFORMATION
日本教育情報学会

NO. 108 別冊

2004年日本教育情報学会・情報教養研究会シンポジウム

『21世紀のリテラシーを考える』報告

開催概要

開催日 2004年5月2日(日) 14:30~17:00

会場 ぱるるプラザ京都6階会議室6

(1) 基調講演と総括

「21世紀のリテラシーを考える」 常磐大学教授 堀口秀嗣

(2) パネルディスカッション

「21世紀が始まって感じた教育の今日的課題 リテラシーを考える」

コーディネータ 山口大学教授 林 徳治

話題提供者 山口大学教授 沖 裕貴

兵庫県教育委員会指導主事 泉 廣治

大坂府立牧野高等学校教頭 北川敬一

羽衣学園高等学校教諭 米田謙三

山口市立川西中学校教諭 井上史子

内容要約

(1) 基調講演 「21世紀のリテラシーを考える」 堀口秀嗣

「社会人として必要な力」の中から“情報”を切り口として(特にプレゼンテーションに焦点をあてる)

*現代は社会の変化のスピード・社会的価値観の変化のスピードが速まっている。

変化に対応しきれていない学校教育

教師一人ひとりが自分で期待される人間像を持ち、それに近づけるように児童生徒を教える
ていく必要性

*教育を考える上で忘れてはならない要素とし

ての“文化の均質性”(Global化)

現代および近未来の教育について考える。

- ・近未来の社会とは
- ・そこで求められる人間像とは
- ・近未来に実現される教育環境は今とどう違うか
- ・諸外国の取り組みは
- ・不易と流行(変化の中で変化しないもの)は何か



* デジタルエイジのデジタルリテラシーとは (情報提供)

“ Educational technology ” から “ Education technology ” への変化

『2020 Visions による第3の教育改革 先進技術を通して教育を変える』(アメリカ)

2020年の未来を語る14の論文(ビジョン), 2002年9月 85頁より

これらのビジョンを絵で表現する試み(ジョージ・ルーカス財団)の紹介

“与えられる”ではなく, “取ってくる”という感覚での学び

“仮想現実”(Virtual Reality)から“拡張現実”(Augmented Reality)への変化

従来のリテラシー(読み・書き・計算)および聞く・話す・コンピュータでも限界がある。

新しいリテラシーの定義が必要(Digital Age Literacy)

2000年以降にアメリカで創られた21世紀のスキル

Digital Age Literacy	デジタル時代のリテラシー
Inventive Thinking	発見的・発明的(独創的)な思考・発想
Effective Communication	効果的なコミュニケーション
High Productivity	高い生産性



* 日本の場合

今の「情報活用能力」の定義では具体的な子ども像は見えない。

大切なことは, “人間の裸の脳+ICT=?”トータルで21世紀の人間の能力(脳力)を考えたい。

「発揮して初めて評価できる」ということを強調していかなければならない。

* 社会で評価される人間とは(私見)

情報コミュニケーション力, 情報アクセス能力, 情報表現力, 情報構成力を備えた人間 “情報体力”のある人間

* 情報体力とは(私見)

情報体力 = 情報瞬発力(短時間で) + 情報持久力(根気・追求心)

これらは今の段階では発達段階知ではなく経験知である。

メラビアンの法則

* コミュニケーションの効果の3要素

話の内容 7% 話し方 38% ボディラングージ 55% (アルバート・メラビアン(米))

日本の発表は「話の内容7%」だけで行われることが多い。

* ボディラングージの5要素(ジェスチャー・動き・視線+アイコンタクト・顔の表情・姿勢)が自然

にできるように経験を積みせるとともに, 教師は一人ひとりに注意してあげる必要がある。

(2) 話題提供

【沖】「21世紀のリテラシーを考える~大学生に必要なリテラシー~」

* コミュニケーション能力には土台としての批判的思考力(Critical Thinking)があり, その上に意

思表明のための表現力や構成力、情報収集力などがある。

今の大学生は調べて発表することはできるが、そこから議論を深めることができない。

次世代には“コラボレーション”と“寛容”の態度が重要となる。

- * FD 研修の成果より、授業技術は授業の成否に7~8割近い影響力があることがわかっている。教師は“教師のリテラシー”として、プレゼンテーションとしての授業技術の重要性を理解すべきである。
- * 大学教授は論理構成の部分は出来ているが、音声情報や視覚情報、レディネスの把握の部分が来ていない。レディネスの把握には「強制連結法」などを活用したい。

【泉】リテラシーの定義：機能的識字 (Functional Literacy)

「個人が属する集団や共同社会を効果的に機能させるための活動に積極的に関わる事ができるような読み・書き・計算能力であり、自分自身の発達と共同社会の発展のために使い続けられるような能力」

* 社会で求められる能力とは

- ・ 目標達成力：目標を達成し、その達成に前進する力
- ・ 人脈形成力：自分と異なる人々とのネットワーク形成
- ・ 自己学習力：明日への学習、5年後のための学習
- ・ 自己表現力：自分の言葉で表現し、人を説得する力

* 企業が求める能力とは

- ・ 信頼性：求められるものを提供する能力・正確さ
- ・ 迅速性：素直・迅速に顧客の役に立とうとする気持ち
- ・ 安心感：知識の専門性、丁寧さ、親切な態度
- ・ 共感性：顧客の立場を理解したきめ細かな配慮
- ・ 具象性：外観への配慮、信頼される身だしなみ



学校教育でこれらの力を見据えた教育が行われる必要もあるのでは

【北川】「教師に必要なリテラシーを考える」

- * 大阪府でも情報に関する研究会などで取り組んでいる。先進的な授業に取り組んでいる学校は教師の熱意があるいは設置者の考え方がどうかかわらないがうらやましいと感じる。
- * 大坂府では行政の電子化が進んでいるが、研修会では身に着かなかった教師が必要にせまられてコンピュータの使い方を身近な先生に習っていた。やらざるを得ない状況が研修意欲を促進した例だが、教員研修のあり方についても見直していかなければならない。

【米田】「情報科授業への取り組みの紹介」

- * 特徴：「ユネスコ寺子屋運動」「大学での授業見学」「専門家による技術指導」「プロジェクトへの参加」などを通じた自己分析・評価
：「TV会議・意見交換・海外研修・修学旅行」「総合的学習・進路学習・教科の情報化」
の中での自己分析・評価

* 具体例

- (1) 児童生徒がつくる「ユネスコ・世界寺子屋運動」リーフレット
- (2) ICT プロジェクト「高校生の情報化と国際化に対応できるコミュニケーション能力育成に関する実証研究」

- (3)ハイスクール・ハザードマッププロジェクト(高校生の安全意識国際比較調査と安全対策。新世紀型犯罪に巻き込まれないために)
- (4)教科英語での取り組み

【井上】「学校教育におけるリテラシーとは」

- * リテラシーという言葉への教師の認識度の低さ
「基礎基本」や「社会を生きるために必要な力」と読みかえると・・・学力(知)・人間形成(徳・体)の両面からのリテラシーがある。
- * 学校教育における今日的課題
 - ・教育目標の曖昧さ(具体的な方策への共通理解)
 - ・指導と評価の乖離(子どもの学びの結果に責任を持つ)
 - ・教科学習の中で育てる“生きる力”

(3)会場からの声

大学の授業改善の一策として、携帯メールを活用した授業を行っている。大学生は道具としての携帯電話は使いこなすことはできる(感情的な好き・嫌いはずぐ応えることができる)。しかし、説得力のある論述の文章を書くことは出来ない。道具として使いこなすリテラシーと論述するリテラシーは別なものであるから、国語力の育成とスキルの育成は同時並行で考えていかなければならない。

(滋賀大学教授 宮田 仁)

京都府教育委員会でもパソコンを使えるようになる教員研修に重点を置いてきたので、リテラシーに対する認識は低いと思う。情報教育担当者は今後、そういった点も考慮して研修を計画すべきである。

(大宮第一小学校 和田光)

美術教育の例より、非常に授業熱心な先生が子どもの授業への意欲や取り組みの向上をめざして授業準備を行ったが、子どもの認識の中では「課題だからやっている」という意識が根強い。リテラシーは単なる知識やスキルとしてとらえるのではなく、生きて場に使えるものでないと意味がない。教師自身がそのことを理解して実際の現場で指導することは大変難しいと思う。

(京都芸術大学 横田学)

現代はおかしなカタカナ語が氾濫している。リテラシーもそれに近い感覚で先生方に受け止められているのではないか。リテラシーは「人間の社会で安全に、快適に暮らすための力」ととらえている。だからあらゆる教科の学習が根底にあって、そこで得た知識を生かす(表現する)ためにパソコンスキルを見につけることも必要。

(岡山理科大学 大西荘一)

高齢者など情報活用能力に遠い人々もいる。このような人々を支援するための社会教育に力を入れている。(研究会員)

ビジョンがあれば必ずプランがある。プランがあれば評価(evaluation)が必要。目標を達成できたかどうか、どんな力が身についたのかの挙証がもとめられている。評価をきちんとしないとカラマわりしてしまう。

(山口大学 沖 裕貴)

文責 研究会幹事 井上史子